るのである。斯の如きは、日常生活では、極めて正當な事である。されど、是の精神の習慣を移して、思辨の範圍に迄至らしめる時、吾人は眞正の實在を誤認し、好んで不可解の問題を創出するのである。かくして實在世界には、尙々生動活躍的のものがある事を、看却するのである。

エレアのツェノーンは、アキレスが、一歩先じた龜に、永劫追つく事の不可能なるを論證して、以て運動の謬妄なるを明にした。が、彼の議論は、全く運動を、そが通過する空間と、混同した爲めに、生じたのである。少くとも、運動をば空間の如く、取扱ふ事が出來るものと考へ、その自然の發現を捨てゝ顧みず、却つて之を分割し得ると、考へるからして生じた議論である。彼は云う

た。アキレスが、その追躡する龜に、決して追つく事の出來ないのは、彼が龜の居つた點に達した時には、龜は其時間の間に、若干前方へ進み、かくして無限に至るからであると。哲學者は、色々樣々の方法で、是の論證に反駁を加へた。吾人は、その何れが、果して決定的論駁であるかに惑ふのである。されど、此難問を解決すべき、極めて單簡な方法がある。アキレス自身に問うて見る事、これである。アキレスは事實上龜に追つき、是を追越してさへ居るのであるから、如何にして之を遂行したかを、他の人々よりも、遙かによく知つて居る筈である。進行する運動の可能を、反證したツェノーンは正しい。たゞ彼の誤つたのは、左樣な註解は附けないで、自分でその運動をやつて見なかつた處にあるのだ。

アキレスに向つて、自らの運動に註解せよと、要求したならば、彼はたゞ論より證據、と答へたに違ひない。ツェノーンの要求する處は、吾人に今居る點から、龜の居つた點に進み、此點から、又次に龜の居つた點に進み、かくして無限に龜の後から追うて行かせよう、と云ふのである。然し吾人が實際龜を追う時は、決してツェノーンの云ふ通りにはしない。先づ一歩を進み次に一歩と、かくして歩を重ねて行く。特定數の歩を運ぶと、最後の歩で、龜に追附く。かくして吾人は、不可分割なる行動の、一系列を遂行する。此進行は、是等の行動の系列である。之に歩數だけの部分を、區別して認める事は出來る。然し是を他の法則に從つて、分離する權利はない。又他の方法で、之を斷節あるものと、想像す

る權利もない。ツェノーンの云うた通りに進行する時は、是れ、進行を以つて宛ら通過空間の如く、勝手に分解し得られるものとするのである。是れ、進動を以つて、軌道に眞實適合するものと、信ずるのである。是れ、運動を不動と一致せしめるものである。從つて又兩者を全然混同するものである。

然るに、吾人の普通使用する思惟方法は、正しく斯くの如き混同の上に、成立して居るのである。吾人が運動について推理するや、宛ら運動は不動を以つて造られたものゝ樣に推理する。運動を視るや、之を構成する不動を以つて見る。吾人にとつては、運動は一の位置、次に他の一新位置と、かくして不定限に至る位置である。誠や、吾人は屢々云ふ。運動には位置以外他の物がある。

一の位置から、他の位置へ移る通過がある。之によつて間距を通るのである、と。されど此通過に注意を向けんか、吾人は直ちに、之を一系列の位置と、する事が出來る。この位置には、又通過を想定し、之を更に又位置とし、斯くして無限に至るのである。而も吾人が眼を轉じて、通過を見る時、そは常に消滅して位置となり、終に之を捕捉する期が無いのである。然し、吾人は兎も角、此通過の存在を承認し、之に名を與へる。それだけで、吾人には充分である。故に一度是に名をつけて仕舞ふと、吾人は直ちに眼を轉じて位置を顧み、唯偏にこれを處理して滿足して居る。運動の觀照は、吾人の思惟に、幾多の難問を惹起する。吾人は本能的に之を恐れて居る。不動を以て、吾人自らの支持點とせんと、要

求するや否や、初めて吾人は滿足するのである。運動は唯一實在か、然らずんば無である。その中間を許さない。もし、最初から不動が實在であるかも知れぬ、と云ふ樣な考を持つて居たら、假令、捉へ得たと思つた運動でも何時の間にか、指間を脱して掌中の玉たることは得ないのである。

上來運動について述べ來つた處は、如何なる變化についても、同樣に立言することが出來る。一切の眞實の變化は、不可分割的である。吾人は好んで、變化を、繼起する狀態の一系列と、考へようとする。斯くて變化は、是等系列の組成となる。これ誠に自然の事である。もし變化が、吾人の心内に於いても、又外界事物に於いても、同樣に連續的であるとすれば、「自我」と稱ぶ不斷の

變化が、「物」と稱ぶ不息の變化の上に、働く事の出來る爲めには、是等二つの變化の相互關係は、前に云つた二列車に類似の位置にあるを必要とする。たとへば、物が色を變へると云ふ時には、その變化は、變化の構成要素であつて、而もそれ自身には、變化しない一系列の色調で成立せるものと、考へられて居る。然し、各色調は、客觀的には如何樣に存在するかを顧みれば、そは無限に迅速なる、エーテルの振動ではないか。即ちこれ變化である。更に主觀的方面から云つても、色調の知覺は、仔細に之を見ると、我が人格の一般狀態中の、孤立抽象的一樣相に過ぎぬ樣に思はれる。然るに我が人格そのものは、全體として不斷に變化し、一見不變と見える知覺をも、此變化に與からしめる。事實を云へば、

如何なる知覺も、刹那刹那に、變形しつゝあるのである。是に由つて之を觀れば、客觀的に存在する色は、動性そのものであり、之を知覺する吾人の人格は、尙一層動性である。然るに、事物についての知覺作用の機制は、凡て事物に對する行動の機制と同じく、外的動性と內的動性との間に、前述二列車の關係に似た位置を將來する樣、規定されて居る。勿論、列車の場合よりも、遙に複雜ではあるが、矢張り同種類の位置である。對象の變化と、主觀の變化との二變化が、斯る特殊の條件內に起る時、彼等は「狀態」と稱ばれる特殊の假現を、惹起するに至るのである。一度「狀態」を所持せんか、吾人は是を以つて、變化を再構成する。これ程自然な事はない。變化を斷片にして得た狀態は、吾人をして、

事物の上に働くを得しめる。吾人が、變化そのものよりも、遙に多く狀態に關心する事は、實際上有利である。されば行動に利益あるものが、思索には致命傷を與へるのである。變化を以つて、眞に狀態の組成と觀念せんか、夫の運動問題が從來惹起して居た一切の難問、一切の二律背反は、直ちに生起するに至るのである。これ實に眞實實在に眼を塞ぐものである。

二、變化・運動は實在であるが變化物・運動體の存在は無必要

我々皆が、運動と變化と、その何れたるを問はず、之を經驗し、その直接・具體的觀照を得ようと力めたならば、必らずやその絶體的不可分割なることを、感知するだらう。進んで第二の點に行かう。是れは第一の點に甚だ近いもので、實は再び新方面から、同一眞理を表はすものたるに過ぎぬ。「變化は存在するが、變化する物は存在せぬ。變化は物と云ふ支持物を必要としない。運動は存在するが、運動する不變物は、必ずしも存在しない。運動は動體を含意せぬ。」

吾人が、此の如く對象を表象する事は、殆んどない。如何となれば、感官中、特に優越の地位を占めて居るのは、視官である。然るに眼は全視野中に於いて、比較的不變な形態を、切取つて見る習慣がある。而してこの形態たるや、自己は變形する事なくて移動するものと、想像されて居るからである。この場合、運動は

偶有性として、動體に添加されるだけである。日常生活では固定的で、謂はゞ信頼的な對象を取扱ふ事が、事實上有利である。此種の對象に對しては、人間に於けるが樣に、憑依し、利用する事が出來る。視官は元と觸官から發達して來たものであつて、外物世界に對する吾人の作動を容易ならしめる樣準備して居る。然し飜つて聽官に訴へて見れば、運動及び變化を獨立實在と明覺する事、比較的容易である。旋律を聽いて、恍惚となつたとする。この時、動體に附着しない運動そのもの、變化物なき變化そのものを、純粹に知覺するではないか。この時變化それだけで充足で、他物を要しない。否、變化は物そのものである。是を時間から取離さうとしても徒勞である。そは不可分割である。その曲調が、

中途で停止したならば、夫は最早元のまゝの諧調でなくて、別の諧調となるだらう。而してこれも亦同樣に、不可分割である。吾人は旋律を分割し、そして不斷の連續としないで、判然と區別ある音符の並置として、表象せうとする傾向を、持つて居る事は爭はれぬ。何が故に然るか。是れ、單に聽覺作用が、視像に型つて働く、習慣がある爲めである。樂隊長は奏樂の區切りを注視するからして、音樂を聽き乍ら、視覺心像を生じ得る譯である。吾人は斯る視覺心像を以つて、諧調を聽いて居るのである。吾人は一枚の想像的紙片の上に、音符を並置して表象する。吾人は演奏家の打つ鍵盤や、上下左右に動く弓や、銘々役割を持つて居る音樂家について考へて居る。此等の空間的心像を捨象すれば、殘る處

のものは純粋變化である。夫はそれ自らで充足であつて、決して變化する「物」に附着する事は無いのである。

視覺に歸つて調べて見よう。よく〳〵注意して見ると、視覺の場合に於いても、聽覺と同樣に、運動は動體を、變化は實體を、必要としない事が分る。既に物理學は、物質的對象を斯く見る樣、暗示して居る。斯學の進歩するに從つて、物質を溶解して空間を通過する作動、戰慄の如く此所彼所を流動する運動として仕舞ふ。かくして動性が、實在そのものたらんとする傾向が見える。勿論物理學は、此動性に支持物を想定して、研究を初める。然し、その討究の進むに從つて、支持物は不用となつて行くのである。質量は分子に還元され、分子は原子に還元され、原子は又電子或は

微分子に還元される。かくて進めば、無限小の運動に附與された支持物は、單に便宜上の作り物たるに過ぎぬ樣に思はれる。換言すれば、唯在來の想像の習慣に對して、學者が讓歩して承認するものたるに、過ぎぬ樣に思はれる。然し、そこ迄追究して論ずる必要は少しもない。一體、眼が、運動の中に存すると認める動體は何であるか。そは單に着色ある斑點に過ぎないではないか。然るに、この斑點そのものは、非常に迅速な振動の系列に、還元し得られるものである。然らば、所謂一物の運動と稱せられるものは、實は單に運動中の一の運動に、過ぎないのではないか。

然し、變化の實體性たる事の、最も顯著に分るのは、內面的生活に於いてゞある。人格性に就いて、多くの學說が困難矛盾に陷

るのは、皆次の如き源因に依つてゞある。即ち、一方に於いては、人格を分明で而も不變な多數の心理狀態の一系列とし、自我の變化は、是等狀態の繼起によつて生ずるものと、考へるからである。又他方に於いては、同樣に不變な自我が此等狀態の支持者であると、想定するからである。如何にして、此統一性と此の多數性とは、結合し得られようか。兩者何れも持續しないのに、何うしてそれで持續する自我を、構成する事が出來ようか。(その統一性が持續しないと云ふ故は、此場合、變化は統一性に對し添加物であつて、その本質でないから。又多數性が持續しないと云ふ譯は、それが變化しない要素で組立てられて居るからである)。然るに眞實を云へば、不變の基體も存在しなければ、舞台上の役者の如く作

動する分明狀態も、存在しないのである。存するものは、唯內面生活の連續的諧調あるだけである。此諧調たるや、我々の意識的生活の初頭から終極迄、不可分割に進行する旋律である。吾人の人格性とは正しく斯の如きを言ふのである。

此不可分割なる變化の連續こそ、正しく眞正持續(la durée vraie)である。私は他の書で論じて置いたから、此所では此點に就いて深入りはしない。只こゝでは此「眞實持續」(la durée réelle)を以つて、極めて神秘不可思儀なものである樣に思ふ人々に答へて、是は凡ての物の中で、最も明々白々のものである、と云ふに止めて置かう。眞實持續は、吾人が常に時間と稱んで居るものである。勿論、不可分割的として知覺された時間である。時間が連續を含意する

事は私も拒まぬ。然し、連續は初めから「前」「後」と云ふ如き並置的差別として、意識にあらはれるとの主張には、同意し得ない。旋律を聽く時、最も純粹な繼起の印象を受ける。そは同時性とは全く異る印象である。斯る印象を吾人に與へるものは、實に旋律の連續性と、不可分割性とである。若し之を分割して、多數の音符「前」「後」とせんか、是れ旋律に空間的心像を混入し、繼起に同時性を移入するものである。事實を云へば、たゞ空間に於いてのみ、部分相互の外部的區別が、存在するのである。私は「意識の直接與件についての論文」に於いて、我々の普通住む所は、空間化した時間内に於いてゞある事を承認した。我々は深奥なる生命の不斷の喧音噪音に、耳を傾けようとしない。而も眞實持續は

そこに在るのである。同一唯一の時間内に生起する變化が、多少の差はあれ、我々の内界及び外物世界に於いて、流動繼續するのは、實に此眞實持續の力によるのである。

是に由つて之を觀れば、内界から見ても、外界から見ても、自我から云つても、外物から云つても、實在は動性そのものである。是れ、吾人が變化は存在するが、變化する物は存在しない、と云ふ意味である。

萬法流動の光景を視て、或者は眼眩するかも知れん。彼等は、堅固な地上に、生活するに馴れて居る。彼等は、動搖振蕩に適應する事が出來ぬ。彼等には、思惟及び存在の據所となる固定點が必要である。萬法流轉せば、何物も存在せぬと思つて居る。實在

が動ならば、之を思惟する時、そは最早流過し去つて、思惟の對象となる事は、出來ぬと考へて居る。が、決して心配する必要はない。變化を直接直下に注視するならば、世に此程實體的持續的のものは、あり得ない事が分つて來る。茲に於いてか、議論は移つて第三の點に入るのである。

三、過去と現在との關係、記憶の性質

上述の如く、變化は實在である。否一切實在の本質だとすれば、吾人は過去を見るに當つては、是迄哲學や日常用語によつて、習慣的に解釋して來たとは違つた見方を、しなければならぬ。我々は、過去を非存在と、考へる癖がある。而して哲學者は、我々に自然な此性向を奬勵する。哲學者も我々も、現在だけが自存するものと、思つて居る。若し何物かゞ過去の中から存續するならば、そはたゞ現在の援助によつてのみ、然るのである。云つて見れば、現在が御情けで助けてやるものだけが、存續し得るのである。比喩を離れて云へば、記憶と云ふ特異な機能があつて、過去中の或部分だけを、一種の箱の内へ貯藏して、特別保存の働をする。この記憶の媒介によつてのみ、過去の或物が、存續し得るのである。斯う云ふ風に、普通我々は考へて居る。茲に謬妄がある。勿論確にそは、生活には有用必須な謬妄であつて、吾人の作動が、切實に要求する爲め生じたものではあるが、然し思索にとつては、危險至極のものである。哲學的思索を墮落せしめる多くの謬妄は、

此内に包藏されて居るのである。

唯一存在と思はれて居る、此「現在」について反省して見よう。一體、現在とは何であるか。現前の刹那を現在と云ふならば、それは明かに純粹抽象である。私は、是を以つて數學的刹那と云ひたい。そが時間に對する關係は、數學上の點が、線に對する關係に似て居るから。兎も角眞實の存在たるを得ないものである。吾人は、數學的點を以つて、線を構成しないと同じく、決して斯る刹那を集めて、時間を造る事はない。一歩讓つて、假りにそんな瞬間が存在したとする。如何にして他の一瞬間が、此瞬間に先在するだらうか。此等の二瞬間は、時間の間距によつて、分離する事は出來ぬ。何ぜと云ふに、時間は瞬間の並列と、前以つて假定さ

れて居るから。されば、その一瞬間は、何物によつても、分離されぬものである。從つて又彼等は、結局一に歸する筈である。是れ、相接する二箇の數學點は、混合するものであるからだ。が、斯んな細かい議論は、暫らく拔きにしよう。常識で明かに分る如く、我々が現在と云ふ時に、我々の考へて居る現在は、幾干かの間距ある連續である。何れだけの連續であるか、精密に確定する事は不可能である。そは浮動的のものである。現在と過去との關係を明かにする爲め、此瞬間を文章構成に於ける成句に喩へて、說示して見よう。所謂瞬間をさして我が現在と稱ぶのは、さう言明した方が、都合がよいから云ふ成句たるに過ぎない。斯く現在を明かに言葉で言表はすのは、我が注意の範圍を、此成句だけに

制限する事が、好都合だからである。然るに此注意は、コンパスの二點間の距離の標に、延長收縮し得るものである。差當りの所、此注意の二點は、我が言明した成句（現在）の初まりから終り迄の間を、動くだけで足つて居る。が、尙多く動かさうと思へば、現在は言明した成句以外、尙それに先だつ成句を包容するだらう。此場合たゞ、今一つの句讀點を、採用すれば足つて居る。尙注意を多く働かせる。かく不定限に擴大する注意は、先在成句から先在成句をと包容して進み、現在の成句よりも前に在る成句は、悉く皆包容する事となるだらう。いやそれ處か、其文章よりも尙先きに在る事件をも包容し、かくして過去と稱ばれるものの中から、望むだけ多量の部分を、注意範圍内に將來する事が出來る。吾人

が現在と過去との間に劃する區別は、勝手氣儘と迄は云はれなくても、少くとも吾人の注意が、生活を包含する延長の大小によつて、定まるものである。「現在」は此努力の及ぶ範圍を占めて居る。此特殊注意が、留意範圍から何物かを取落した時には、その放擲された部分がその儘直ちに過去となるのである。一言で云へば、吾人の現在でも、現實の關心が無くなれば、過去になつて仕舞ふのである。個人の現在でも、國民の現在でも、此點に於いては同一である。當時の政治に直接關係がなく、之を閑却しても差支ない事件は、過去の歷史中の事變となる。その事件の影響が、今尙殘つて居れば、それは國民生活の内に、生きて居るのである。從つて國民にとつては、過去でなくて現在である。

是に由つて之を觀れば、現在と過去との分界線は、いくらでも後方に持運ぶ事が出來るもので、之を妨げるものは少しもない。充分强烈で、而も一切の實用的利害を充分離れた、注意を以つて、生活を見ると、その注意は、渾然たる現在の內に、意識者の全過去の歷史全體を、包含するのである。過去が現在に包含されてあると云つても、決して同時として存在するのではない。不斷に現前すると共に、連續的に進動して居るものとして、存在するのである。不可分割で、始めから終り迄、不斷の現在をなして居る旋律は、正に斯くの如きものである。元より此永續性たるや、不變性とは、全然別種である。又此不可分割性は、瞬間性と少しも共通な所が無いのである。茲で云つて居るのは、持續する現在である。

是れ決して假設ではない。稀有ではあるけれど、注意が忽然として、實際生活の關心を、捨てる事がある。その時、魔術によつての如く、過去は現在へ復歸する。思ひ設けず、突然死に面する人——たとへば、絕壁の底に墮ちた登山家、或は溺死せんとする人、絞首臺上に立つ人——に於いては、上述の如き唐突な注意の轉換が、生ずる樣に思はれる。今迄將來に向ひ、作動の必要に沒頭して居た、意識の方向が變じて、忽然沒關心となる樣に見える。此注意の轉換は、幾千萬の「忘れて居た」細々の事を、充分記憶に喚び起し、その人の全生涯を、パノラマの樣に、展開せしめるに足つて居る。然れば、過去は存在するのだが、之を明覺する爲

めに爲すべき事をなさぬから、顯はれて來ないだけである。

斯の如く見來れば、記憶の如何なるものなるかは、說明を要せずして明かである。否むしろ、過去を現在に換へる爲めに、過去を保存する事を、役目として居る特別の能力は、存在しないのである。過去は自動的に自己を保存するものである。誠や、變化の不可分割性に眼を閉ぢ、最も遠き過去も現在に附着し、之と共に唯一不斷の變化を構成して居る、と云ふ事實を看却する時は、過去は普通の場合無であり、過去の保存は、特異な場合の樣に、思はれて來る。この時、吾人は、意識に再現し得る樣、過去の諸部分を記錄する事を以つて、その機能とする一種の道具を、想像しなければならぬ、と思ふに至るのである。然し、もし內面生活の

連續性、及び不可分割性を明かに認めれば、最早過去の保存は說明を要しない。之に反して、說明すべきは過去の表面的廢棄である。想起を說明する要はなく、却つて忘却を說明せねばならぬ。而してこの說明は、腦體の構造に求めることが出來る。自然は吾人の注意を過去――現在の行動に關係なき部分の歷史――に向はしめずして、將來に向はしめる事を以つて、職分とする一の機制を發明した。たとへ過去に注意を向けても、精々の處で、次の如き役目を果す機制たるに過ぎぬ。即ち、過去の經驗を單純化したものをば、現在の經驗を補足完成する爲め、「想起」と云ふ形で、注意圈內に引入れる役目を、盡すだけである。是れ即ち腦髓の機能である。「腦髓は過去を保存する。腦髓は想起を貯藏する事、宛

ら寫眞原板の如くで、こは後に現像し得るものである。或は蓄音機の如くであつて、必要の時發聲し得るものである」、と云ふ風な學說を、今一々議論する暇がない。詳論は他書（「物質と記憶」）でして置いたのである。兎も角、この學說は、大部分一種の形而上學に刺激されて、生じたのである。この形而上學は、現代の心理學、生理的心理學の普く包含するところとなつて居るし、又一般の人々も、自然に承認するものである。上述の腦髓に關する學說が、一見自明のものゝ如く思はれるのは、その點から來て居る。然し、能々調べて見ると、此說では幾多の難點不可解點が生じて來る事が分る。此定說に最も好都合な場合をとつて見ても分る。たとへば、物質的對象が眼に印象を與へ、之によつて視覺的記憶

が出來たとする。若し論者の云ふ如く、此記憶が、眞に腦髓內で、視覺的印象を固定した結果として生じたものならば、その記憶は何んなものであるだらう。對象が動くか或は又た眼が動くかした時に生ずるものは、一の心像でなくて、幾百千の心像であるだらう。丁度活動寫眞のフィルムの上に寫つた、映像の如くであるだらう。同一對象を或時間考察した時、或は又種々の瞬間に於いて見たならば、此對象から百千萬の心像を生ずるだらう。而も此さへ、最も單純な場合を、例示しただけである。此等の心像が、悉く貯藏してあると想像して見て、扨て彼等は如何樣に存續するか。吾人の利用するのは、その內の何れであるか。假りに、その中から一印象を選び取つたとしても、吾人は之を明覺した時、之を現

在のものとしないで、過去の内へ投返すのは何故であるか、又如何にしてゞあるか。論者の主張は、此等の難問を惹起するのであるが、是は暫らく措いて、一體記憶の障碍を何う説明するか。記憶碍障即ち失語は、腦の局部障碍に對應するものであるが、この場合その心理的障碍は、何によつて起るかと云ふに、記憶の廢棄によつてではなくて、記憶想起の無能力によるのである。一努力一感情は確かに忘却したと信じた言語を、俄然として意識に喚び返す事が出來る。此等の事實は、多くの他の事實と共に、次の事を證明して居る。即ち、腦髓は過去の内に於いて選擇を行ひ、過去を減少し、單純化し、利用する役には立つが、之を保存する用には立たぬ、と云ふ事を證明する。過去は廢棄されて居る、と信ずる習慣がつくと、腦は過去を保存するもの、との謬見が容易に生じて來る。かくて過去の再現は、非常に奇異な事件となり、説明しなければ分らぬものとなるのである。而して吾人が腦髓を以つて、過去の部分を保存する、記憶箱の如くに想像するのは、是に依るのである。(此時腦髓は、過去を保存するのみならず、自己自らをも保存するのである)。かくの如くんば、難點を減ずるのでなくて、單に問題を添加するのである。腦物質が時間を通して自己を保存すると考へたならば、更に廣く云へば、一般に凡ての物質が、持續するものと考へたならば、是れ物質によつて記憶を説明せんとしながら、實は物質に記憶を附與するものではないか。説明せらるべき物をば、説明する物に添加するだけであつて、少

しも説明にはならぬ。要之に、如何樣に考へても、又假りに、腦髓が記憶を貯藏すると想像しても、過去は自動的に自己を保存する力を具へて居る、と云ふ結論を避ける事は出來ぬ。

自己保存をするものは、我々の過去だけでは無い。もし渾一不可分割の變化だけについて云へば、變化の如何なる過去も、自己保存をするものである。過去が現在の內で自己を保存する、と云ふ事は、變化の不可分割性と、同一事を指して居るのである。誠や、外界で行はれる無數の變化は、結局單一變化に歸するか、それとも反對に、中間に停止を挿入した樣々の變化の一複合體となるか、その何れであるか、斷言する事は屢々困難であり、時としては不可能である。此點について確實に斷言せんが爲めには、吾人は、吾人自己に對して爲したと同じ樣に、物の內部に透入しなければならぬ。然し、こは重要な事ではない。たゞ、實在は變化である。變化は不可分割である。而して不可分の變化に於いては、過去は現在と一體となる事を、斷乎として確信すれば足つて居る。

四、流動原理の適用

此眞理を深く體得すれば、幾多哲學上の謎語は、自然に解け去るのである。實體問題變化問題兩者相互の關係問題の如き、或種の大問題は最早起らぬ。此等の諸點に蝟集する凡ての難問は、吾人が變化の不可分割性に眼を閉ぢるから、生ずるのである。若し一切經驗の本質たる變化が、大多數の哲學者の云うた通り、浮動

して捕捉し得ざるものならば、又若し變化が、單に狀態を充す無數の狀態に、過ぎぬものならば、無理にも人工的紐帶によつて、此等狀態の連續性を、確立しなければならぬだらう。然し、動の基體として想定された、此不動體は、如何なる屬性をも、持つことが出來ぬ。これ、一切は變化だから、その屬性に近づかうとすればする程、そは退去して捉へ得ないからである。されば彼等が、幻象的變化を固定させるため、持ち出した不動の基體も、變化と同じく捕捉し得ないものである。之に反して、在るがまゝの變化を、その自然の不可分割性に於いて、明覺しようと努めて見よ。さすれば、變化こそ事物の實體たる事が分るのである。この時運動には、最早之を思惟對象たらしめる事を妨げる、不安定

性がない。又實在には、之を經驗に入り難からしめる、不變性もない。不安定性も不變性も共に、眞實變化の連續をば、外部から抽象的に見るが故に、生じたものである。精神はこの抽象をば實體化して、一方に於ていは多數の狀態とし、他方では物或は實體としたのである。運動及び變化が、實體的であるから、夫の古代哲學者が、變化問題について提出した難問は、悉く消失する。又實體は運動及び變化であるからして、近世哲學者が、實體問題について提起した難點も、凡て無くなるのである。

かく多くの理論上の曖昧點が消失すると共に、不可解を以て知られた二三の問題を、解決し得る方法が發見される。自由意志問題を例に採つて見る。決定と云ふ事が必然に意味を失ふ具體的持

續(une durée coucrète)の內に、我れ自らを置いて明覺するならば、自由意志に關する論爭は、終局を告げるだらう。何故と云ふに、此具體的持續內では、過去は現在と一體となり、之と共に絕對的に新しいものを、不斷に創造するからである。又人間對宇宙の關係も、狀態や性質や、その他一見固定的の如く思はれる、凡てのものの本性を、領會する時は、漸次深奧にする事が出來るのである。不動とか固定とかは、主觀と客觀とが、前にあげた二列車の關係に、類似の地位にある時、現はれるものである。不動性は、動性を動性の上に特定の置方をしたとき、生ずるものである。されば、此思想を深く究め、事物の靜的觀想に翻譯される、主觀と客觀との特殊關係を、見失はぬ樣にせよ。然る時は、客觀について獲る

凡ての經驗は、主觀についての知識を增加する事となる。斯くして明かにされた主觀は、反映によつて又客觀を明瞭にする事が出來る。

本講演の初めにも言明して置いた通り、純粹思索は、單に斯る宇宙的流動の觀相を、利するに止まらぬ。吾人は、此純粹思索を日常生活に、浸透せしめる事が出來る。而して吾人は、之によつて藝術の與へる滿足の如き充實した滿足を、哲學から獲る事が出來る。否、この哲學の與へる滿足は、藝術のそれよりも、一層度數多く、一層連續的で、而も一般人間にとつて一層獲得し易いものである。勿論藝術は、吾人が自然に明覺するよりも、尙多くの性質、尙多くの色合を、事物の內に發見せしめる。藝術は、我々

の知覺作用を擴大膨脹する。が、深遠の度に於いて膨脹しないで、寧ろ表面の廣さを擴大する。藝術は吾人の現在を豐富にする。然し現在の範圍を超越させない。哲學に於けるや、吾人は、現在を過去から決して分離しない習慣を、附ける事が出來る。哲學によつて、一切の事物は深遠となる。いや、深遠だけではない。空間は三方面あるが、哲學によつては、更にその上に、第四方面を加へる事が出來る。といふ意味は、哲學によつて先在知覺が、現在知覺と緊密に抱合し、又間近の將來が、一部分現在に於いて、自ら顯示する事を得る、と云ふ事である。かくて實在の存在樣式は、最早靜的狀態ではなくなる。實在は、その傾動の連續性と可變性とに於いて、動的に自證する。吾人の知覺中に於いて、不動・凝固だつたものは、熱して液化し、自動するに至るのである。吾人の周圍を包饒する一切萬有は生動・進展し、吾人心界の一切は生々・活躍する。存在及び事物は一大躍進(un grand élan)の中に、流動轉化して居る。吾人は又之れによつて、高揚し、牽引され、進動するのである。爰に吾人の生活は擴大するのである。而して此生活の擴大は、次の如き確信を得しめるのである。即ち、最も重大な哲學上の難問・謎語は、自づから解決する事が出來る。否、是等は、元來宇宙を凝固的觀照で見るから生じたもので、畢竟吾人の活力が、人爲的に微弱にされたものをば、思惟の名辭で翻譯したものたるに過ぎない。從つて、本來生起すべき問題では無いだらう、と云ふ確信である。一切の事物を、「持續の相に於いて」(sub specie

durationis)思考.知覺する習慣がつけばつく程、吾人は愈々深く眞實持續の內に、沈潛するのである。而して沈潛する事愈々深ければ、吾人は益々宇宙の根本原理に近づくを感ずるのである。吾人はこの根本原理を分享する。而してその永劫は、不變の永劫でなくて、生と進動との永劫である。然らずとせば、如何でか吾人は、永劫中に生活し、運動し得られようぞ。吾人は、この永劫の中に生活し、運動し、存在して居るのである。(In ea vivimus et movemur et sumus)

不圖も豫期に反して深入をしたから、今はこゝで御別れをしよう。

下、流動の哲學 終

I

ベルグソン著作目録

(a) 著書及小冊子

Quid Aristoteles de loco senserit, (Thesis), Paris, 1889.

Essai sur les données immediates de la conscience, Paris, 1989.

Matière et Mémoire, Essai sur la relation du corps avec l'esprit, Paris, 1896.

Le Rire, Essai sur la signification du comique, Paris, 1900.

L'Evolution créatrice, Paris, 1907.

La Perception du Changement, Conferences faites a l'Université d'Oxford les 26 et 27 Mai, 1911 Oxford, The Clarendon Press.

(b) 論說(ベルグソン自身の學說を發表せるもの)

La Spécialité. (Address at the distribution of prizes at the lycée of Angers, August, 1882.)

Du la simulation inconsciente dans l'état d'hypnotisme. (Revue philosophique, Vol. 22, 1886, pp. 525-531.)

Le bon sens et les études classiques. (Address at the distribution of prizes at the "Concours général des lycées et collèges." 1895.)

Mémoire et reconnaissance. (Revue philos. Mar., Apr.

1896, pp. 225-248 and 380-399. Republished in Matière et Mémoire.)

Perception et matière. (Rev. de Met. et de Mor. May 1896, pp. 257-277. Republished in Matière et Mémoire.)

Note sur les origines psychologiques de notre croyance à la loi de causalité. (Lecture at the Philosophical Congress in Paris, 1900, published in the Bibliothèque du Congrès International de Philosophie ; cf. Revue de Metaphysique et de Morale, Sept. 1900, pp. 655ff.)

Le Rêve. (Lecture at the Institut psychologique international : published in the Bulletin de l'Institut psych. intern. May 1901 ; cf. Revue scientifique, 4e s., Vol. 15, June 8, 1901, pp. 705-713, and Revue de Philosophie, June 1901, pp. 486-489.)

Le Parallélisme psycho-physique et la métaphysique positive. (Bulletin de la Société française de Philosophie, June 1901.)

L'Effort intellectuel (Revue philosophique, Jan. 1902.)

Introduction à la metaphysique. (Revue de Mét. et de Mor. Jan. 1903.)

Le Paralogisme psycho-physique. (Lecture at the Philosophical Congress in Geneva, 1904, published in the Revue de Mét. et de Mor. Nov. 1904, pp. 895-908 ; see also pp. 1027-1036.)

L'Idee de néant, Rev. philos. Nov. 1906, pp. 449-446. (Part of Chap. 4 of L'Evolution créatrice.)

Notice sur la vie et les oeuvres de M. Félix Ravaisson-Mollien. (Lecture before the Academie des Sciences

morales et politiques : published in the Proceedings of the Academy, Vol. 25, pp. 1 ff. Paris, 1907.)

Le Souvenir du présent et la fausse reconnaissance. (Rev. philos. Dec. 1908, pp. 561-593.)

Life and Consciousness. (Hibbert Journal, Decennial Number 1911, London.)

(c) 雜篇

Lucrèce : Extraits.....avec une etude sur la poésie, la philosophie, la physique, le texte et la langue de Lucrèce. Paris, 1884.

Principes de métaphysique et de psychologie d'apres M. Paul Janet. (Revue philos. Vol. 44, Nov. 1897, pp. 525-551.)

Collaboration au Vocabulaire philosophique, (Bulletin de la Soc. fr. de Phil. July 1902, Aug. 1907, Aug. 1908, Aug. 1909.)

Remarques sur la place et le caractère de la Philosophie dans l'Enseignement secondaire, (Bulletin de la Soc. fr. de phil. Feb. 1903, pp. 44 ff.)

Remarques sur la notion de la liberté morale, (Bulletin de la soc. fr. de Phil. Apr. 1903, pp. 101-103.)

Remarques à propos de la philosophie sociale de Cournot, (Bulletin de la soc. fr. de Phil. Aug. 1903, p. 229.)

Préface de la Psychologie rationnelle de M. Lubac, Paris, Alcan, 1904.

Sur la relation à W. James, (Revue philosophique, Vol. 60, 1905, p. 229 f.)

Sur la théorie de la perception, (Bulletin de la soc. fr. de Philos. Mar. 1905, pp. 94 ff.)

Rapport sur le concours pour le prix Bordin, 1905, ayant pour sujet Maine de Biran. (Mémoires de l'Académie des Sciences morales et politiques, Vol. 25, pp. 809 ff. Paris, 1907.)

Rapport sur la concours pour le prix Le Dissez de Penanrun, 1907. (Mémoires de l'Académie des Sciences morales et politiques, Vol. 26, pp. 771 ff. Paris, 1909.)

Sur l'Evolution créatrice, (Revue du Mois, Sept. 1907, p. 351.)

A propos de l'évolution de l'intelligence géométrique, (Revue de Mét. et de Mor. Jan. 1908, p. 21 ; cf. L'Année psychologique, 1908, pp. 229-231.)

Sur l'influence de la philosophie sur les élèves des lycées, (Bulletin de la Soc. fr. de Philos., Jan. 1903, p. 21 ; cf. L'Année psychologique, 1908, pp. 229-231.)

Réponse à une enquête sur la question religieuse (La Question religieuse par Frédéric Charpin, Paris, 1908.)

Remarques sur l'organisation des Congrès de Philosophie. (Bulletin de la Soc fr. de Phil , Jan. 1909, p. 11 f.)

Préface à un volume de la collection les grands philosophes, (G. Tarde, par ses fils). Paris. Michaud, 1909.

Remarques à propos d'une thèse soutenue par M. Dwelshauvers " L'inconscient dans la vie mentale." (Bulletin de la Soc. fr. de la Philos., Feb. 1910.)

A propos d'une article de Mr. W. M. Pitkin intitule

" James and Bergson." (Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods, Vol. vii, No. 14, July 7, 1910, pp. 385-388.)

(*d*) ベルグソン著作外國語翻譯

(i) 英譯

Time and Free Will. tr. by F. L. Pogson. George Allen, London, 1910.

Matter and Memory. tr. by N. M. Paul and W. S. Palmer. George Allen, London, 1911.

Laughter: An Essay on the Meaning of the Comic. tr. by C. Brereton and F. Rothwell. Macmillan, London, 1911.

Creative Evolution. tr. by A. Michell. Henry Holt, New York, 1911.

(ii) 獨譯

Zeit und Freiheit. Eugen Diederichs, Jena, 1911.

Materie und Gedächtnis. Mit Einführung von W. Windelband. Eugen Diederichs, Jena, 1908.

Einführung in die Metaphysik. Eugen Diederichs, Jena, 1909.

Schöpferische Entwicklung. Berechtigte Übersetzung von Gertrud Dr. Kantorowicz. Eugen Diederichs, Jena, 1912.

Das Lachen. Eugen Diederichs, Jena, 1913.

(iii) 以譯

La filosofia dell' intuizione. trad. di G. Papini. Lanciano. 1909.

II

ベルグソン關係書籍目錄

Balsillie, D.; An Examination of Professor Bergson's Philosophy. Williams and Norgate, London, 1912.

Berthelot, René; Evolutionisme et Platonisme. (Mélanges d'histoire de la philosophie et d'histoire des sciences, Paris, 1908.)

Carr, H. Wildon; Henri Bergson—The Philosophy of Change. J. C. and E. C. Jack. London, 1911.

Chaumeix, A.; La philosophie de M. Bergson. (Pragmatisme et Modernisme, Paris, Alcan, 1909.)

Chide, A.; Le mobilisme moderne, Paris, Alcan, 1908.

Coignet, C.; La vie d'après M. Bergson. (Bericht über den III Kongres für Philosophie, Heidelberg, 1909)

Cristiani, L.; Le problème de Dieu et la pragmatisme. Paris, Bloud et Cie; 1908.

Dantec, F. Le,; L'Evolution créatrice. (Science et Conscience, Paris, Flammarion, 1908.)

Dwelshauwers; Raison et Intuition, 1906.

Elliot, H. R.; Modern Science and the Illusion of Professor Bergson. Longmans, Green and Co., London, 1912.

Farges, A.; Théorie fondamentale de l'acte, avec la critique de la philosophie nouvelle de M. Bergson. Paris, Berche et Tralin, 1909.

Fouillée, A.; Le mouvement idéaliste et la réaction contre la science positive, Paris, Alcan, 1896.

Fouillee, A.; La pense et les nouvelles ecoles anti-intellectualistes. Paris, Alcan, 1911.

Garrigou-Lagrange, F.; Le sens commun, la philosophie de l'être et les formules dogmatiques. Paris, Beauchesne, 1909.

Gillouin, R.; Henri Bergson, Paris, 1910.

Gillouin, R.; La philosophie de M. Bergson. Bernard Grasset, Paris, 1911.

Hermann; Eucken and Bergson: Their Significance for Christian Thought. James Clarke, London.

James, W.; A. Pluralistic Universe. London, 1909.

Joussain, A.; Romantisme et Religion, Paris, Alcan, 1910.

Levi, A.; Sulle ultime forme dell' indeterminismo francese. Firenze, Civelli, 1903.

Levi, A.; L. Indeterminismo scientifico. Modena, 1910.

Le Roy, E.; Une philosophie nouvelle. Paris, Alcan, 1912.

Lindsay, A. D.; The Philosophy of Bergson. J. M. Dent and Sons, London, 1911.

Masci, F.; L idealismo indeterminista, Napoli, 1899.

Morselli, E.; Un nuovo idealismo, Udine, Tosolini, 1900.

Petrone, I.; Sui limiti del determinismo scientifico. Modena, 1900.

Piat, C.; De l'insuffisance des philosophies de l'intuition, Paris, 1908.

Pradines, M.; Principes de toute philosophie de l'action, Paris, 1910.

Prezzolini, G.; Del linguaggio come causa li errore, (H. Bergson), Firenze, Spinelli, 1904.

Steenbergen, A.; Henri Bergsons Intuitive Philosophie, Engen Diedenchs, Jena, 1909.

Segond, J.; L'Intuition Bergsonienne. Paris, Alcan, 1913.

Solomon, J.; Bergson. Constable, London, 1911.

Tarozzi, G.; Della necessità nel fatto naturale ed umano, Torino, Loescher, 1806—97.

Tonquébec, J. de; La notion de la vérité dans la philosophie nouvelle, Paris, 1908.

Tonquébec, J. de; Comment interpréter l'ordre du moude à propos du dernier ouvrage de M. Bergson. Paris, Beauchesne, 1908.

Windelband, W.; Einführung zum materie und Gedächtnis, Jena, 1908, pp. 1—15.

不許複製

大正二年四月四日印刷
大正二年四月四日發行

東京京橋銀座
警醒社書店
振替東京五五三

民友社印刷

定價金七拾錢

譯者　錦田義富

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福永文之助

印刷者　東京市京橋區日吉町十番地
渡邊爲藏

本書はイエナ大學教授オイケン博士が最近天下に發表したる信仰告白也。近代文明は基督教と衝突し、殆ど之を否定し去らんとするに拘はらず、基督教は猶依然として存在の權利を有することを闡明す。しかも博士は基督教傳來の形式に滿足せずして新基督教の必要を主張す。博士の哲學思想、宗教に對する態度、近代のあらゆる傾向は本書を通じて窺ふことを得べし。

オイケン（ルドルフ）教授著。額賀鹿之助先生譯。

吾人は尚基督教徒たり得る乎

再版

海老名彈正先生序。　三並良先生の「オイケン教授印象記。」

□定價金七拾錢
□郵稅金八錢

ジョージ・フラトーン博士著。哲學博士元田作之進先生譯

新刊

哲學通論

定價壹圓參拾錢
郵稅拾貳錢

コロンビヤ大學哲學科學長フラトーン氏の著を、留學中、親しくその敎を受けた元田氏が譯出したものである。フラトーン博士は常に敎室にあつて、如何に深遠な學理の秘奥でも、頗る平易に雜作なく說き明すので、その態度に模して我が文學に移したのである。全篇を「外界に關する諸問題」「心に關する諸問題」「諸種の哲學說」「哲學的諸科學」「哲學の研究」の諸章に分ち、日常茶談の言葉と眼前口頭の例示とを以て、明快にしてそして樂々と困難な謎を解釋してある所は從來の哲學書とは全くの色調を異にしてゐる。（讀賣新聞）

千葉鑛藏先生譯

輓近倫理思潮の傾向

本書は英國倫理界の鴻儒シジヰック氏の後を承けて、現にケンブリッヂ大學の倫理學の敎授たるソオレイ氏の名著にして、歐洲殊に英國の輓近倫理思想の傾向を啻に、專門の學生に向てのみならず、一般の敎養ある士人に向て講述せしものたり。十九世紀と現代との倫理思想の根本觀念の差別を說き、新道德の勃興ニイチエの倫理觀、倫理學上の自然主義、グリイン、ブラドレイの觀念論の批評等は其の主要にして、延いてプラグマデズム・ギヨオ等の新道德にまで論及せり。

（再版定價六拾錢）

千葉鑛藏先生撰輯

泰西思潮

第壹輯

ハアバアト・スペンサア論……フレデリッキ・ハリソン
生命と意識……アンリイ・ベルグソン
トオマス・ヒルグリインと
ヘンリイ・シヂヰックと……ヂエムス・ブライス
ドストエフスキイとニイチエと……ユリウス・ビヤバウム
戰爭の道德的代用法……ウヰリアム・ヂエムス
ハアヴアアト大學に於ける一大佛蘭西學者…ウヰリアム・ヂエムス
道德と文藝……アルベルシエン

定價五拾錢

文學博士
大西祝先生遺稿

西洋哲學史

上卷

本書載する所希臘哲學の原始より中世哲學の末に至る。其間歐洲に於ける思想變遷の跡說き盡くして餘蘊なく加ふるに文章瑰麗精緻、よく原學說の風說を傳へ讀む者をして直に、古哲人に接して其說を聽くの感あらしむ。

……定價壹圓六拾錢……

下卷

本書近世哲學の祖ベーコン・デカルトに筆を起こして最近世に至る。其の精確なる叙述、嚴密なる批評、光彩ある文章、啻だ我國の哲學的著述に比類なきのみならず、泰西に於ても容易に其の儔を見るべからざるもの、我思想界の重寶なり……定價貳圓

文學博士 波多野精一先生著

スピノザ研究

定價七拾錢
郵税八錢

近世哲學の世界觀の根柢となれるものは實に汎神論なり。しかして汎神論の大系は實に、スピノザの本體論に於て成就せらる。本書はスピノザが汎神論に精細なる分析と、鋭利なる解剖とを施したる新研究にして、著者が博士論文として提出せられたるもの也。

350
27

終